

審査の結果の要旨

論文提出者氏名： 原 瑠璃彦

本論文は、洲浜という物およびその表象の全貌を捉え、またその意義の解明を目ざしたものである。

本論文では、洲浜とは、洲が曲線を描きながら出入りする浜辺であるとし、平安時代の歌合などで用いられた、曲線的な輪郭を持つ台の上に和歌的表象のミニチュアが立てられる作り物を「洲浜台」と命名し、形象としての「洲浜」とは区別している。

先行研究では、この「洲浜台」の考察が十分になされていないが、本論文での分析のかかなりの部分は「洲浜台」にあてられており大きな成果を挙げている。

本論文は、二部構成で、第一部は、序と第一章から第三章、補論一から成り、第二部は、第四章と第五章および補論二・結びから成り、本文はA4判344ページ、それに図版出典一覧と参考文献・URL一覧あわせて33ページが付されている。

第一章「平安時代における洲浜台の諸相—和歌と組み合わせた贈与と天皇主催の晴儀の歌合—」では、まず平安期における和歌とセットとなった洲浜台の贈与の例が挙げられた後、平安朝の歌合における洲浜台の使用例が検討される。ほば萩谷朴『平安朝歌合大成』に拠った分析ではあるが、独自の視点としては、二十三例ほどの洲浜台を用いる歌合を前期・後期に分け、九世紀末から十世紀末までの十二例を前期のものとして、その分析が行われる。ちなみに後期（十一世紀～十二世紀）の十一例は、第四章で分析される。前期の十二例中、とくに村上天皇主催の「天徳四年（九六〇）三月三十日内裏歌合」が詳細に分析されている。この「天徳内裏歌合」は、後世の歌合の規範とされる大規模な歌合であり、その中で洲浜台は、総合芸術的な饗宴の焦点であったとされる。

第二章「平安時代における和歌と風景の表象—和歌の観念的表象と政治的機能—」では、『古今集』成立以後顕著となる、名所・歌枕といった共同記憶に依拠する観念的風景歌が隆盛する傾向の上で、倭絵屏風や倭絵障子あるいは庭園などとともに洲浜台が果たした機能が検討される。洲浜台もまた観念的風景歌の成立の中にあって重要な役割を果たしたが、屏風絵や障子絵や庭園ではそれらが見られた上で和歌が詠まれるのとは異なり、洲浜台制作とそれに関連する和歌制作は同時的に進行する場合が多いことが指摘される。

また「大嘗祭における^{ふぞく}風俗歌と大嘗会倭絵屏風」の項では、天皇の即位にあたって献上される地方の地名を詠み込んだ風俗歌は、天皇の擬似的^{くにみ}「国見」であって、天皇のその地域の主権掌握の機能を有するものであり、それはまた名所・歌枕の政治的機能に通じるとされる。名所・歌枕を含む和歌とも大いに関係する洲浜台もまた、天皇の国見的な国家掌握の一面を持っていたとされる。

第三章「平安時代における洲浜の表象の意義」では、洲浜の表象の多様な側面がトピックス的に描かれた後、その意義について聖地としての海辺という視点からの解明という仮説が提唱される。

トピックスとしては、洲浜台は、後代の島台や蓬莱台ほどは神仙思想の要素は強くないことや、洲浜台の源流としては、現存する正倉院の仮山などが挙げられるが、折口信夫説のように大嘗祭における^{ひょうのやま}標山とは直接関係はないであろう等々、多面的な言及がなされている。

洲浜の表象の意義については、水のほとりで催される歌垣の考察を起点として、折口信夫の「水の女」説をベースとした上で、玉依姫型の海辺での聖婚の儀礼がクローズアップされ、たとえば洲浜台が中心的に機能する「天徳内裏歌合」なども、擬似的な聖婚の場としての晴儀の歌合であった、という仮説が提起されている。

補論一「海辺の経験と王権―八十嶋祭と『源氏物語』」では、難波の浦や住吉の浜で行われる^{やそしまのまつり}八十嶋祭と王権との関わりが説かれる。住吉の浜は洲浜として描かれることも多い（佐竹本『三十六歌仙絵巻』、『住吉物語絵巻』など）。八十嶋祭は^{みそぎぼらえ}禊祓の祭りの性格も強いが、基本的には天皇の即位儀礼であり、しかも原八十嶋祭は、天皇による国生み神話の現場の国見であるとし、それが住吉の浜で行われる意義が強調される。こうした理解から、『源氏物語』での光源氏の須磨・明石での体験や住吉詣・絵合などの読み変えが行われる。

第四章「洲浜台の衰退と浄土表象の成立―藤原頼通をめぐって―」では、先に述べたように、十一世紀に復活する後期の洲浜台が出る歌合十一例が分析される。中でも中心になるのは、洲浜台が庭園の池の中を舟で運ばれるなどの新趣向が盛り込まれた藤原頼通主催の^{かやのいん}「高陽院水閣歌合」（一〇三五）である。しかし、前期歌合と異なり、後期においては洲浜台と和歌の結びつきは弱くなる傾向を示し、やがて洲浜台自体、歌合では用いられなくなる。そのかわり、洲浜の形象は藤原頼通の建てた、平等院鳳凰堂という池中の中島の美しい楼閣によって復活を遂げている。さらに平等院鳳凰堂とその中島の洲浜形は、後に浄土図の極楽建築の描写に大きな影響を与えたことが指摘される。

第五章「中世以降における洲浜の表象の系譜―洲浜・風流作り物・白砂―」では、歌合における洲浜台消滅以降の中世・近世の洲浜の表象の系譜が様々にたどられる。中世では、『平家納経』や『浜松図屏風』、『毛越寺庭園』をはじめとする各庭園、『年中行事絵巻』に見られる風流笠、あるいは^{わりごのふりゅう}破子風流などが挙げられており、近世になると洲浜台の後継として島台がはっきりとした姿を見せる。第三章での指摘をふまえれば、近世の婚礼の場に島台が必ず置かれるのは、聖婚の記憶を潜在的に残す平安期の洲浜台が、近世に入って島台としてよみがえった姿と見ることができよう。また洲浜は白砂青松の空間と見られており、白砂の空間装置の問題も提起されている。

補論二「洲浜の音―海辺の松風と波音」は一種のサウンドスケープ論であり、白砂青松の洲浜に響く音の典型を、楽音にも通じる松風の音や波音に求めている。

本論文は、今まで個別の洲浜の研究はあっても、その全貌を把握し体系的に整理する試みのなかった現状に対して提出された、唯一の洲浜研究のモノグラフであり、意義深い力作である。

ただし審査会では、叙述がカタログ的に流れがちであること、洲浜とは何か、とくにその独特な形象の意味とは何か、という問題に対して決定的な解決が与えられていない、などの疑念も呈された。しかし、本論文において、洲浜の表象やその意義について明確な結論が導かれたとまでは言えないとしても、ほぼすべての洲浜的表象を網羅して、その意義・機能について様々なアプローチを試み、その不可思議な表象にあたう限り迫り、以後の洲浜研究の重要な基盤を形成した意義は非常に大きく、本論文の学術的価値は高いと結論づけられた。

したがって、本審査委員会は全委員一致で、本論文提出者に博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。